

「縄文人はオレの真似をしている」

そうおっしゃったのは、かの岡本太郎先生でした。縄文人もさぞかしめくらつたでしょうが、言わんとすることはそのくらい新鮮だったことでしょう。そして岡本太郎氏の言い方を借りれば、縄文土器は「何だこれは！」という爆発的なエネルギーに満ちていたということだったのでしょうか。

そんな縄文土器を、日本人なら皆絶対一度は写真などで見ているはずですが、どんなに美術に興味がない人でも、日本美術史の本の最初の方のページで、ここだけは見るという場所に掲載されています。しかし同時にこれだけで美術に興味を失って、次の「弥生の美術」はもう見なくなる、その元凶でもあるのです。これはどういうことでしょうか。日本人の美術離れの原因の一つは、この縄文土器や縄文時代の「土偶」が何とも（A）「思え、人々に「またこれか」と思わせてしまうところにあります。では、なぜ「もういい」と感じるのでしょうか。それは例えばこうなるわけです。

「これならウチの子供が小さい頃やってた粘土細工と同じだ」

そうです。ここにこそ縄文のポイントがあるのです。まさにその粘土細工を、一万年前に日本列島の人々がやっていたのです。別の方を見ると、あなたの子供の粘土細工も、奇跡的に一万年残ればこうなるということでもあります。そして遠い将来それを見た未来人も、同じ人間なら（火星人に征服されていなければ）、「やれやれまたこれか」と感じることでしょう。そのくり返し。何万年たっても人間は皆同じ。本質は変わらないのです。

とは言え、とにかく土でできた器が一万年も残っているということは、並々ならぬことではないでしょうか。私はこれこそが縄文土器や縄文時代の出土品の魅力だ、と考えています。

さて、一万年前の日本人が、土器の表面に縄をこりこすりつけ、何やら模様のようなものをつけているところを想像してください。

なんでそんなことをしているのでしょうか。模様がなくても、土器としては使えますね。それどころか縄文土器には実用にシショウをきたすと思えるほど、出たりひっこんだりしている、凝りに凝っているものが多いのです。使う時に指がひっかかって邪魔だと思った縄文人もいたかもしれません。

よほどヒマだったのでしょうか。それは違います。彼らの日々の時間のほとんどは食料の確保や子供の世話というシカツ問題に

使われていたはずですが、ではそれほどまでしてなぜ、こんな手のこんだ一見ヒマつぶしに見られる行為をしていたのでしょうか。

私はここでパプア・ニューギニアの、現在も現地の人々によつて使われている土器を思い出します。それは煮炊き用の鍋で、表面には「へび」が描かれています。へびは彼らにとつて神様です。そしてニューギニアの人々は何とその神様であるへびをこの鍋で煮て食べてしまうのです。神様に体の中に入っていたくという発想から、へび神様をクッキングする鍋にへびの絵が描かれているのです。その様子が目に浮かびませんか？ 何ということだ、という感動と同時に、そんな！ という驚きがあるでしょう。しかしこれこそが人間と神々、そして自然、宇宙がまさに一体化する感動的瞬間なのです。

縄文について、²この考えをもとに想像をふくらませてみましょう。「なんでこんなにまで鍋、釜を縄の目の模様で飾らなくてはならなかったのか」という問いです。そこでもう少しくわしく文様について考えてみると、一つの共通した傾向が見えてきます。それは「うずまき」文様の存在です。

うずまき。それは今も昔も私たちの身近にとても多く見つけることができます。子供の頭を見ると、まずつむじがうずまきです。赤ん坊を抱くと、このうずまきしか親の目には入ってきません。ここではうずまきは大切な愛するもの、かけがえのないものと一つになつて存在しています。

水道の蛇口から勢いよく出た水が排水口へ流れる形もうずまき。これはあまりになじみがありすぎ、言われないと気付かないかもしれません。しかしここにおいてうずまきは、大自然の法則と共にあります。

巻貝を真上から見ると、これはもう完全なうずまきです。このうずまきは美と同義です。

花を真上から見ます。すると葉や花びらはらせん状、即ちうずまきのように芽をふきながら順番に生えてくることに気付きます。この場合は、はかなく、（B）生命としてのうずまきです。

もしかするとうずまきは、この世の中の不思議なこと、大切なこと、美しいこと、自然なことに共通する根本存在かもしれません。そのことを縄文人たちは考えていたに違いないのです。ですから、そのうずまきを自分たちのつくった土器に描くということは、むしろ極めて自然な行為と考えるてもよいでしょう。そのようにして、自分たちがつくった人工物を宇宙の現象や事物と一体化させていったわけです。それで大切な食料を煮炊きしたり、実をチョウウするということは、実にすばらしいことではないでしょうか。

人里離れた地において、³私たちは夜になると満天の星々の中にいることに気付きます。そして、いやでもここが宇宙だと感じるのですが、寝ころんで空を見ていると、体が軽くなって宇宙に浮かんでいるような気になることさえあります。縄文人にとつてはそれが日常だったのです。日々の瞬間に、宇宙の中で自分が生きていると感ずります。天の怒りのような竜巻や冬の木枯らしなどのふとした

出来事、へびがとぐろを巻いているその（ C ）様子など、うずまきは X の様々な形となって彼らの前にあらわれている……。それを自らの造形物に描きしるし、その力を借りようとすることに、何の不自然があるでしょう。

私はこのようなことから、縄文土器のほとんど全ての装飾模様はうずまきを基本にして、^えテンカイしていったと考えています。作り手は、うずまきをタテにのぼしたり押しつぶしたり横にのぼしたりしながらその間を埋めていく。その過程で点を打ったり線を引くなどの新たな意匠がひらめいたり、いろいろな形に変形させたりして、様々に発展させていったのだらうと、^おスイソクしています。

底部がとがっている土器、これは自力で直立できないものです。当然、土の中に下部を埋めて使ったことでしょう。中に果実など、大切なものを入れて使っているところを想像してください。土の茶色と土器がうまくハーモニーを奏で、緑の草や花々ともとけ込み絶妙に調和しているのが目に浮かびます。ところが、縄文土器が博物館の陳列棚の中に、ピアノ線でつられて展示されていて、少しも感動しないし、美しくもない。教科書に、^{注7}白バックで載っている、何だかよくわからなくて、面白くもおかしくありません。土に埋めたり、美味しそうな果物でも入れたりして撮った写真が日本美術史の本に載っていたら、さぞかし（ D ）ページになるに違いないのに……。見せ方一つで、美術に対する興味も理解も大きく違ってくるはず。学者や編集者のイマジネーション一つで、縄文人の宇宙観が伝わることでしよう。そうすれば縄文土器はもつと魅力的なものになるに違いありません。

さてあなたのお子さんの粘土細工に「 Y 」はあるでしょうか。それを探するのは、縄文の応用として面白いことですし、日常を新たな視点で見ることでもあります。ふだんの何げない人工物にうずまき文様があったら、それはまさしく縄文時代の記憶の残像なのではないか。そう思っているいろいろなものに接する目を持つ。それが縄文という文化、精神を現代に生き続けさせる、ということなのではないでしょうか。

（千住博『美術の核心』による）

【語注】

（注1） 岡本太郎 …… 1911～1996。日本の芸術家。

（注2） パプア・ニューギニア …… パプアニューギニア独立国。南太平洋にあるニューギニア島の東半分及び周辺の島々からなる国家。

（注3） らせん …… 巻き貝の殻のようにぐるぐると巻いている状態。

（注4） 意匠 …… 芸術作品にほどこす工夫。

（注5） ハーモニー …… 二つ以上のものがうまく調和すること。

（注6） ピアノ線 …… 非常に強力で、ピアノの弦やばねなどに用いる金属の線。

（注7） 白バック …… 白色・無地の背景で写真をとること。

問一 部あゝおのカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。（かい書で、ていねいに書くこと）

問二 （ A ） （ D ）にあてはまる語としてふさわしいものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア おそろしい イ いとおしい ウ おびたらしい エ つまらなく オ 興味深い カ 仰々しく

問三 部1「ここにこそ縄文のポイントがあるのです」とありますが、ここで筆者はどういうことを言おうとしていますか。

その内容を説明したものとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 岡本太郎氏の作品を真似をして縄文時代の人々が土器を作っていたという指摘は、全く的外れであるということ。

イ 日本人が美術離れになってしまふ大きな原因の一つとして、縄文土器を美術史の本で見ることが挙げられるということ。

ウ 縄文土器に見られる「うずまき」の特徴こそが、縄文時代の人々の宇宙観を理解する重要な手がかりであるということ。

エ 縄文時代の土器や土偶にほどこされた加工は、いつの時代にだれがやっても変わらないようなものであるということ。

オ 土でできた縄文時代の土器が一万年以上たっても現代に残っていることが、縄文土器や出土品の魅力であるということ。

問四 部2「この考えをもとに想像をふくらませてみましょう」とありますが、ここで筆者はどういうことを言おうとしていますか。その内容を説明したものとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア パプア・ニューギニアの人々が土器に描いているへびは彼らにとつての神様であることを手がかりにして、縄文時代の人々にとつての神様は何であるのかを縄文土器から見つけ出そうということ。

イ パプア・ニューギニアの人々が土器にへびの模様をつけるのは時間にゆとりがあるからではないかと仮定し、縄文時代の人々もうずまき模様をつけたのは同じ理由からだ結論を出したいということ。

ウ 縄文時代の人々が使っていた土器とパプア・ニューギニアの人々が使っている土器には「へび」という大きな共通点があり、この共通点を縄文文化が現代に生き続けている証拠としたいということ。

エ パプア・ニューギニアの人々が土器にへびの絵を描くのは自然界や宇宙の万物とつながろうとしているからだ想定し、縄文土器に人々がほどこしたうずまきの意味も同じであると考えるというということ。

オ 縄文時代の人々が描いたうずまきを真似してパプア・ニューギニアの人々が土器にへびを描いたのだという予想から、うずまきはその時代の人類にとっても欠かせないものと断定してみようということ。

問五 — 部3「私たちは夜になると満天の星々の中にいることに気付きます」とありますが、この表現は本文を進める上でどのような役割を果たしていますか。その役割を説明したものとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 星をながめると心やすらぐのは、現代の人間であつても変わらないという例を挙げることで、縄文時代の人々を現代に生きる我々が理解するのは難しくないと読者に語りかけている。

イ 現代の人々にも空をながめる習慣があるという例を挙げることで、現代に生きる我々も身の回りにある「うずまき」を知らぬ間に探していることを読者に気付かせようとしている。

ウ 現代に生きる我々も、自然とのつながりを実感する機会が身近にあるという例を挙げることで、縄文時代の人々と同じ価値観で自然と接していることを読者にわかりやすく伝えている。

エ 現代に生きる我々には満天の星空を見ることは難しくなったという例を挙げることで、縄文時代の美しい自然環境はもはや取り戻せないものであるということを読者に訴えかけている。

オ 現代の空にまたたく星は縄文時代と同じ輝きであるという例を挙げることで、進化する人間とは違って自然は縄文時代から変わらない存在だということを読者に分からせようとしている。

問六 — X にあてはまる四字熟語として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 天変地異 てんぺんちい イ 花鳥風月 ウ 日進月歩 エ 森羅万象 しんらばんしやう オ 空前絶後

問七 — 部4「イメージネーション」の意味として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 芸術性 イ 技術力 ウ 想像力 エ 柔軟性 じゅうなん オ 表現力

問八 — Y にあてはまる四字の語を本文中から抜き出して答えよ。

問九 ~~~~~部「縄文人の宇宙観」とありますが、縄文時代の人々は「宇宙や自然」をどのようにとらえ、どのように接していたと筆者は考えていますか。その内容を八十字以内で説明しなさい。

問題は次のページに続きます。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

戦後まもなく、「ぼく」とその弟は、母の商売が失敗したため、孤児院に預けられる。しかし、二人は孤児院での生活に苦勞し、遠方で暮らす祖母のもとへ助けを求める手紙を送った。祖母からの返信には「とにかく帰っておいで」と書かれた手紙と電車賃として二千元が入っていた。「ぼく」と弟は早速、祖母の家に向かった。

通用門をくぐり抜けると庭になる。庭に向い合つて長い縁側がのびている。その縁側に荷物を置くと、ぼくらは裏へ走り出た。このあたりの商家は家屋の裏に二百坪から三百坪の畑を持っている。野菜は自給自足なのだ。そのためかどうか、町に八百屋は少なかった。

畑は荒れ果てていた。雑草だけがはびこっている。ただ、敷地の中を流れる小川に沿って、トマトの赤や茄子の紫やさやえんどうや胡瓜の緑が見えていた。ぼちんぱちんと鋏を使う音がそのあたりでしていた。

「……ぼっちゃー！」

ぼくらが叫ぶと、鋏の音がやんだ。

「どこ？」

トマトの植えてあるあたりで白いものが動いた。ぼくと弟はそこを目がけて走っていった。

「ぼっちゃ、来たよ」

「おお、来たか」

白っぽい色の浴衣を着た祖母が襦袢を外しながら **A** ている。足許に置いた籠の中に大粒のトマトが光っていた。

「よく来たねえ」

「お金、ありがとう」

「足りなかったろう、あれっぼっちゃじゃ……」

「二千元そっくり残ってる」

ぼくは胸のポケットを左手で抑えてみせた。

「交通費は孤児院の先生から貰ったんだ」

「ありがたい先生がただねえ」

小虫が眼に入つたと言いつつながら祖母は **B** た。

「ぼっちゃ、来る途中に洋品屋があつたけど、あれはぼっちゃの家だよ」

「おまえたちが町を出ていったころだと思うけど、ぼっちゃが死んでねえ」

そのことはぼくも知っていた。葬式へ行くというのとぼくと、あんな鬼爺の葬式になど出る必要がないと言いつつ張る母との間で喧嘩になつてしまったものだ。結局、ぼくが言い負かされて葬式には出ないでしまったが。

「……ぼっちゃが死んでから、うちにだいぶ借金があつたことがわかつたのだよ。それで店を半分、人手に渡したわけ……」

祖母はぼんぼんと浴衣の前を手で叩いた。

「三年振りじゃないか。陰気な話はよそうね。風呂を沸してあげるからまず汗をお流し……」

ぼくと弟は祖母の後について家の方へ歩き出した。陽はだいぶ西に傾いていた。雑草の上を涼しい風が渡ってくる。断髪にした祖母の髪が四、五本はらはらと風にそよいだ。後から見ると祖母はすいぶん小さく見えた。本当に祖母が小さくなったのか、あるいはぼくらの背が伸びたせいでそう見えるのか、それはわからなかった。

ぼくと弟はきつかり十分間で風呂場から出た。弟の着る浴衣の揚げをしていた祖母が老眼鏡の奥で目を瞠った。

¹「昔の同級生とでも逢う予定があるの」

「同級生たちと逢うのは明日からのことにするよ」

ぼくは浴衣を羽織りながら答えた。弟は丸裸のまま祖母の横にしゃがみこみ、祖母の運針に **b** 見とれている。

「でもぼっちゃ、どうしてそんなこと聞くのさ」

「すいぶん早風呂だからだよ。【X】だつておまえたちのようには早くないよ」

「だって、後がつかえると困るもの」

弟が言った。

「みんなの迷惑になるよ」

「だれも迷惑なんかしないじゃないの」

祖母は糸切歯でぶつんと糸を切った。

「前の人が上がってから入る、それでいいんだから」

祖母は弟に浴衣を着せながら、

「おまえたちったら何を慌てているんだろ」

と **C** ている。

ぼくは笑い出した。ぼくらがどうやら孤児院の規則をここまで引きずってきているらしいと気がついたからである。

「孤児院の風呂は畳一帖分もあるんだ。でも一度に五人以上は入れない。ところがぼくらの数は四十人。四人ずつ組にして十組。一組三十分ずつ入ったとしても五時間かかる。それでね、一組十分間と決められているのさ」

ぼくのこの説明に、弟がさらにつけ加えた。

「十分経っても出てこないとなね、先生が長い竹竿でお風呂のお湯をぴしゃぴしゃ叩くんだ。それでもお湯に漬かっていたいと思うときは潜るんだよ、深くね。おもしろいよ」

「妙なことをおもしろがる子だねえ」

また首を捻りながら、祖母は弟の兵児帯を締め終った。

「さあ、夕餉の支度が出来るまで縁側でも涼んでいなさい」

祖母に背中を軽く叩かれて、ぼくと弟は縁側へ出た。

縁側に腰を下し、足をぶらぶらさせながらぼくと弟はいろんな音を聞いていた。表を通り過ぎて行く馬の蹄の音、その馬の曳く荷車の鉄輪が小石をきしきしと砕く音、道の向うの川で鳴く河鹿の声、軒に揺れる風鈴の可憐な音色、ときおり通り抜けて行く夕風にさやさやと鳴る松の枝、台所で祖母の使う包丁の音、それから、赤松の幹にしがみついても悲しく啼くカナカナ。

弟は庭下駄を突っかけて赤松の方へそと近づいて行く。彼は昆虫を捕えるのが好きなのだ。

(……いまごろ孤児院ではなにをしているだろう)

ぼくは縁側の板の間の上に寝そべてて肘枕をついた。

(……六時。お聖堂で夕べの祈りをしているころだな。お祈りは六時二十五分まで、六時半から六時四十五分までが夕食。七時から一時間はハーモニカ・バンドの練習。八時から四十五分間は公教要理。八時四十五分から十五分間は就寝のお祈り……)

孤児院の日課を暗誦しているうちに、ぼくはだんだん落ち着かなくなっていた。しみじみとして優しい田舎のさまざまな音に囲まれているのだからのんびりできそうなもののなのに、かえっていらいらしてくるのだった。生れたときから檻の中で育ったライオンかなにかがいきなり外に放たれてかえってうろたえるように、² ぼくも時間の檻の中から急に外へ連れ出され戸惑っていたのだ。

立ってみたり坐ってみたり、表へ出たり裏へまわったりしながら、夕餉の出来あがるのを待った。

【中略】

お菜は冷し汁だった。^(注7) 凍豆腐や青豆や茄子などの澄し汁を常時穴倉に保存してある水で冷した食物で町の名物だった。

「おや、変な茶碗の持ち方だこと」

しばらく弟の手許を見ていた祖母が言った。弟は茶碗を左手の親指、人さし指、中指の三本で摘むように持っていた。もっと詳しくいうと、親指の先と中指で茶碗を挟み、人さし指の先を茶碗の内側に引っかけて、内と外から茶碗を支えているわけである。

「それも孤児院流なんだ」

忙しく口を動かしている弟に代ってぼくが説明した。

「孤児院では御飯茶碗もお汁茶碗も、それからお菜を盛る皿も、とにかく食器はみんな金物なんだ。だから熱い御飯やお汁を盛ると、食器も熱くなって持てなくなる。でも、弟のようにすればなんとか持てる。つまり生活の智慧……」

「どうして食器は金物なの？」

「瀬戸物はこわれるからだよ」

祖母はしばらく箸を宙に止めたまま、なにか考えていた。それから **D** て、

「孤児院の先生方もご苦労さまだけど、子どもたちも大変だねえ」

と漬物の小茄子を噛んだ。

³ 「……(ちやうど)さよ」

弟がお櫃を横目で睨みながら小声で箸を置いた。

「もうおしまい？ お腹がいっぱいになったの」

弟は黙ったままである。ぼくは時間の箍が外れたので面喰ったが、弟は孤児院の箍を外せないで困っているようだった。ぼくは **Y** 大声で、おかわりと言いい、茶碗を祖母に差し出した。弟は一度置いた箸をまた取って、小声で、ぼくもと言った。孤児院の飯は盛切りだった。弟はその流儀が祖母のところでも行われていると考えて「膳だけで箸を置いたのにちがいがなかった。食事の後に西瓜が出た。そのときも弟は孤児院流を使った。どの一切れが最も容積のある一切れか、一瞬のうちに見比べ判断しそれを手で掴む

のがあそこでの流儀なのだ。

弟の素早い手の動きを見ていた祖母が、悲しそうな声で言った。

「ばっちゃんのところは薬屋さんなんだよ。腹痛の薬は山ほどある。だからお腹の痛くなるほどたべてごらん」

弟はその通りにした。そしてお腹が痛くなつて仏間の隣りの座敷に横になった。祖母は弟に蚊帳をかぶせ、吊手を四隅の鉤に掛けていった。ぼくは蚊帳をひろげるのを手伝った。蚊帳の、ナフタリンと線香と蚊やりの混つたような匂いを嗅いだとき、ぼくは不意に、ああ、これは孤児院にない匂いだ、これが家庭の匂いだったのだな、と思った。思ったときから、夕方以来の妙ないらついていた気分が消え失せて、どこか知らないがおさまるべきところへ気持が無事におさまったという感じがした。

(井上 ひさし「あくる朝の蟬」による・一部改変)

(注1) 孤児院

：身寄りのない子供たちを育てる施設。「ぼく」たちがいる孤児院はキリスト教の教えに基づいて運営されている。

(注2) 兵児帯

：和服用の帯の一種。主に男性や子供が用いる。

(注3) 夕餉

：夕飯。

(注4) 河鹿

：カジカガエルというカエルの一種。

(注5) カナカナ

：ヒグラシというセミの一種。

(注6) 公教要理

：子供たちにキリスト教の教えを伝えるための教材。ここではそれを学ぶ時間のこと。

(注7) お菜

：おかず。

(注8) 凍豆腐

：豆腐を薄く切り、凍らせ、乾燥させた食品。高野豆腐ともいう。

(注9) 盛切り

：ご飯などを食器に一度盛っただけで、おかわりのないこと。

(注10) 蚊帳

：蚊や害虫の侵入を防ぐための寝具。天井からつるして用いる。

(注11) ナフタリン

：殺虫剤や防虫剤の原料。

(注12) 蚊やり

：蚊を追ひ払うためにいぶす木。

問一

部 a・b の語句の本文中の意味として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 「陰気な話」

ア 気分が晴れ晴れとしない話

イ 金銭に関わる意地汚い話

ウ 思い出したくない昔話

エ 今後を暗示する不吉な話

オ 人の生き死にに関係する話

b 「見とれている」

ア 所在なさげに見ている

イ うつとりとして見ている

ウ 技術を学ぼうと見ている

エ ただぼんやりと見ている

オ 不思議そうに見ている

問二

A D にあてはまる言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア A…袂で目頭をそつと拭つ

B…溜息をひとつつ

C…何度も領い

D…小首を傾げ

イ A…袂で目頭をそつと拭つ

B…何度も領い

C…小首を傾げ

D…溜息をひとつつ

ウ A…袂で目頭をそつと拭つ

B…何度も領い

C…溜息をひとつつ

D…小首を傾げ

エ A…何度も領い

B…溜息をひとつつ

C…小首を傾げ

D…袂で目頭をそつと拭つ

オ A…何度も領い

B…袂で目頭をそつと拭つ

C…小首を傾げ

D…溜息をひとつつ

カ A…何度も領い

B…袂で目頭をそつと拭つ

C…溜息をひとつつ

D…小首を傾げ

問三

部1「昔の同級生とでも逢う予定があるの」とありますが、このときの祖母の気持ちとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 二人の孫が自分の思っていたよりも、早く風呂から上がったことに驚き、どうしてこんなに急いでいるのだろうかと思議に思った。

イ 短時間でお風呂から上がった二人の孫を見て、十分ちょうどでお風呂から上がれるのには何か工夫があるのではないかと好

奇心を抱いた。

ウ 二人の孫と久しぶりに会えたことが嬉しく、急いでお風呂から上がる様子に、この後に予定があるのだったら何でもしてあげたいと心に決めた。

エ 突然、孤児院からやってきた上にあわただしく行動をしている様子の二人の孫に疑いを抱き、帰郷の目的が何であるのか探りを入れようと思った。

オ 久しぶりに祖母の家に戻ってきた二人の孫が十分でお風呂を上がったのを見て、この家で過ごすのを気まずく感じているのではないかと不安に思った。

問四

【X】にあてはまる語句として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 魚心あれば水心 イ 河童の川流れ ウ 我田引水 エ 烏の行水 オ 行雲流水

問五

【部2】「ぼくも時間の檻の中から急に外へ連れ出され戸惑っていたのだ」とありますが、「時間の檻」とは具体的に何を指していますか。六字で本文中より抜き出しなさい。

問六

【部3】「……ごちそうさま」とありますが、この場面における「弟」の気持ちを、六十字以内で説明しなさい。

問七

【Y】にあてはまる語句として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 弟を笑わせようと思い
イ 弟に手本を示すつもりで
ウ 何か言いたげな弟に構わず
エ 腹の虫が鳴くのをこまかそうと
オ 弟はなんで困っているんだと思いながら

問八

【部4】「悲しそうな声」とありますが、祖母が「悲しそうな声」を出した理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 孫が孤児院から遊びに来ると聞いてせっかく西瓜を用意したのに、弟が一切れだけしか食べてくれず、泣きたい気持ちになつたから。
イ 一番大きな西瓜を選んだ弟の姿を見て、孤児院では満足にご飯も食べさせてもらえないことがわかり、怒りと悲しみがわいてきたから。

ウ 西瓜を取る弟の様子から、孤児院では制限された食生活を強いられて苦労しているのだろうということがわかり、かわいそうに感じたから。

エ お腹が痛くならないようにと西瓜を一切れだけ食べようとする弟の姿を見て、子どもらしくない大人びた考えを持っていると、滑稽に感じたから。

オ 数ある中から一番大きな西瓜をすぐに見極めて取るのを目の当たりにし、弟が孤児院で意地汚さを身につけてしまったと知り、驚きあきれたから。

問九

【部5】「どこか知らないがおさまるべきところへ気持が無事におさまったという感じがした」とありますが、このときの「僕」の気持ちとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 孤児院と祖母の家の流儀の小さな違いに困惑していたが、入浴や食事の作法で苦しむ弟の姿を祖母の家で初めて見て、孤児院と家庭との違いを確信し、なじみのある孤児院に戻ろうという決意を固めている。

イ 孤児院と祖母の家との生活習慣の違いに立ちを感じていたが、ナフタリンや線香、蚊やりといったものの匂いをかぎ、その良い香りに田舎の良さを覚え、先ほどまで感じていたいら立ちをすっかり忘れている。

ウ 孤児院での生活と祖母の家での生活との違いに少し戸惑いを覚えていたが、ふとしたときにかいだ匂いから、孤児院にいるときは決して出会うことのなかった家庭の持つ温かさを思い出し、安らぎを感じはじめている。

エ 苦しい孤児院での生活から逃れるためにやってきた祖母の家で、自分だけでなく弟もだんだんとそこの生活を楽しめるようになったので、孤児院にはない居心地の良さを感じ、このままここで暮らしたいと考えている。

オ 孤児院での生活と祖母の家での時間の流れ方の違いになじめなかったが、温かいお風呂やたくさんの食事、そして快適な寝床まで用意してくれる祖母への感謝が芽生えたことで、なんとしても祖母の役に立ちたいと決意している。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(i) 次の文章は八つの段落で構成されています。次のア～カの段落を正しく並び替え、文章を完成させなさい。

□ □ □ □ □ □ □ □
 [A] 今の東京都内の混雑ではとても速く走るわけにはいかない。朝夕のラッシュ時には制限速度ですら出すことはむづかしい。事態を認めあきらめればいいものを、誰もかもが先へ先へと行きたがる。苛立ちと不機嫌、それが追突や接触事故をおこすのだ。時々何のために自分は車に乗っているのかと自己嫌悪に陥る。そうして車の人間におよぼす精神的な悪影響を思つてぞっとするのだ。

□ □ □ □ □ □ □ □
 [B] 自動車時代である。^(注1) 巷に車が氾濫している。^(注2) 人間は機械の付属品とされ、無名化され原始的心性に還元される。この現象だけをみれば今の社会でおこっていることは、^(注3) 狂態以外のなにものでもなく、車などに乗るのは愚の骨頂ということになる。私も何度かそう考え、今後車に乗るものと決意してはみたが、又しばらくすると車に乗ってしまった。それは、車が使いようによつては便利で自由な乗り物であるためだろうと思う。車というものがひとたびこの世に発明され、かなりの有用性をもつ以上、それを抹殺して時代をあととどりさせることは、私たちにはもはや不可能なのだ。要は、私たちの人間性をそこなわずに、どのようにして私たちが車を使いこなすかにある。

(加賀 乙彦『あの笑いこけた日々』による)

[ア] さいごに、車は人間を原始的心性に蹴落とす。走るということは非常事態にある哺乳動物が一樣におこなう行動である。餌食を追う猛獣、獲物を競う獵犬、追われて逃げる弱小動物、すべて走る動物の気持ちはささくれだつた興奮におちいつている。ス

ピード競技などはこの原始的心性をうまく利用した遊びなのだ。

[イ] ひきにげの心理は明らかに無名化の心理で了解できるし、事故のとき運転者同士がいきなり敬語ぬきでいがみあうのも相手が社会的地位ある一個の人というより無名化された存在だということをお互いに暗黙に認めているからなのだ。

[ウ] つまり相手の人間よりも、車の種類、大きさ、性能のほうに目が向くというわけである。これは逆に、自分が運転する立場になつても同じことで、小型に乗っているときは小型なみの遠慮深い気持ちに、ダンプのときはダンプ式の暴力的な気持ちになる。いづれにしても人間が機械に従属していることにはかわりはない。

[エ] まず、車は人間を機械付属品にする。私たちが車に乗っていると、相手の人間を気にせず、相手の車に注目する心理がその証左である。豪華なスポーツカーをうらやんだり、ダンプカーをこわがったりしたあとで、車の運転者である美人や黒眼鏡のあんちゃんに気付くという段取りなのだ。

[オ] ところが走ることのみを目的とし、それ以外の機能をもたぬ車という機械は、人間を強制的に非常事態の動物にしたてあげているのだ。車を運転している人がどんなに野蛮な心性になりさがるか、車を運転したことのある人ならば誰でも思いあたるふしがあるだろう。

[カ] つぎに、人間を無名化する。いいかえれば人間から名前と個性とを剥脱して、製造会社が名付けたAとかBとかという名の存在に転落させる。このことから車の事故につきものの無責任さが生じる。

(注1) 巷 …… 人がおおぜい通る所。まちなか。

(注2) 狂態 …… 異常な状態。

(注3) 愚の骨頂 …… 極めて愚かなこと。

(注4) 証左 …… 証拠。

(ii) 次の文章は八つの段落で構成されています。次のア～オの段落を正しく並び替え、文章を完成させなさい。

□ □ □
[A] 日本では、森林と林業という二つの言葉は、相反した意味で使われがちだった。木を伐ることが森を守るという発想を生理的に受け付けない。それどころか、いまだに林業といえば自然破壊産業と思っている人も多いようだ。

□ □ □
[B] たとえば有名なのは、三重県の速水林業が所有する一〇〇〇ヘクタールの森林だ。ここは八割がたヒノキ林だが、林内にある植物数を調査したところ、二四三種だった。一方で同じ地域の天然林の植物数は一八五種にとどまったのである。人工林といってもよく間伐されているため、林内に光が差し込み、草類が豊富に生えているほか、広葉樹も数多く伸びているからだ。それらの木の高さはヒノキより低いから、ヒノキの生長を阻害することはない。速水の人工林を歩くと、昆虫やシカ、イノシシ、タヌキなど野生動物の足跡がたくさん見つかった。生物多様性で、天然林を上まわっていることを実感する。

□ □ □
[C] つまり、天然林と人工林は対立するものではないのだ。そして、森林と林業も相反しているわけではない。条件によって、いかようにも変わる。

(田中 淳夫『割り箸はもったいない?』による・一部改変)

[ア] 一方で、天然林がすべて豊かな森林とは言えない。地質が悪くてうまく木が育っていない地域もある。ササが繁ると、樹木が再び生えるには、非常な時間が必要になるだろう。そんな土地でも、人が少し手を加えることで、森林が復活できる。そうでなくても、天然林の木々の生長は概して遅い。芽吹いても枯れるものが多く、無駄が出るからだ。

[イ] しかし、それらは大きな誤解であることが、現場で証明されつつある。人工林というのは人の手で作られた森林だが、それゆえ人の手の入れ方次第でどんな森にもなる。手入れされないと荒れて危険な状態に陥るのも人工林だが、十分に考えて育てられた人工林は、天然林以上の公益的機能を発揮する。

[ウ] 造林という行為も、同じ樹種の苗を一斉に植えるから、同じ樹齢で並ぶことになる。しかも針葉樹はどんぐりのような木の実を稔らせないので、野生動物に餌を提供しない。だから森林としては多様性が低いと思われる。そして人工林は、天然林に比べて水源涵養機能や洪水調節機能なども弱いといわれることが多い。

[エ] たしかに林業で木を伐るということは、一本の木の生命を奪うだけでなく、倒れる際に周りの木も傷つけるかもしれない。その木を森から搬出する過程で、森の土壌を荒らす可能性もある。

[オ] また高知県で調査された森林土壌の保水力の調査でも、一〇〇年生のスギの人工林の方が、同じ山の天然林を上回る数字が出たことがある。人工林であろうと、これほどの高林齢になり大木が林立する環境となると、林内に多くの下草が生えるから、土壌流出は起きにくい。おかげで森林土壌も分厚く、豊かな生態系が作られていたのである。

(注1) 速水林業 ……三重県で林業を営む企業。

(注2) 水源涵養機能 ……雨水などを吸収して水源を確保する機能。

氏 名

※のらんには何も書かないこと。

				—			
問九				問八	問三	問二	問一
						A	あ
					問四		
						B	
							い
					問五		
						C	
					問六		う
						D	
					問七		
							え
							お
40	60	40	20				

※

[illegible][illegible]